

1930年代米国における大麻規制： ジャズ・モラルパニック・人種差別

Marihuana Prohibition in 1930's United States :
Jazz, Moral Panic and Racism

山 本 奈 生

要 旨

本稿は30年代米国社会において、マリファナがどのようにして逸脱の表象とされ、法規制の対象とされてきたのかを論ずるものである。戦前米国に内在していたレイシズムを前提としつつ、最初期の規制は10年代から開始されるが、これが「モラルパニック」の様相を帯びるのは30年代中頃のことである。

連邦麻薬局の初代長官アンスリンガーは、自ら風説を流布して大麻とメキシコ人、黒人、そしてジャズを結び付け、「良家の女性」を被害者表象として掲げながら、「マリファナ税法」を成立させようと試みた。彼は扇動政治家のように社会は防衛しなければならないとマリファナの脅威を警告し、当世におけるイエロー・ジャーナリズムと映画産業もこれを追認した。筆者は、20世紀前半の米国における「改革主義」およびプロテスタンティズムの倫理を後景として、30年代の反マリファナ・キャンペーンへ至る道程を、モラルパニック論として検討した。

キーワード：リーファーマッドネス、大麻規制、マリファナ、ドラッグ戦争

「人は、自由であるか、もしくは自由でないかのいずれかである。自由を得るための見習修行などありえない」

リロイ・ジョーンズ、『根拠地』

1. はじめに

1930年代中頃において、規制当局とイエロー・ジャーナリズムの言を信じるのであれば、全米を脅かす内なる脅威は、南部から大都市に拡散したマリファナなる新しい麻薬であった。全米に飛散したマリファナの種子は至る所に根を張り、とりわけ白人女性や少年に深刻な影響を与え、その徹底的撲滅こそが社会に課せられた責

務であるように喧伝された。社会は防衛しなければならない。しかし当世のマジョリティは、果たしてマリファナという新たな脅威が、実際の植物としては薬局で売られてきたカナビスと同じものであり、ロコウィードとは別のものであるなどといった基礎的認識すら持っていたかどうかは疑わしい¹⁾。

社会的恐怖すら消費の題材である社会において、マジョリティにとって重要なことはそれが規範的コードからみて脅威であるか否かという点にあり、客体化された出来事の内実など微細なことであるというべきであろう。現代日本においても、大麻とMDMA、覚せい剤とLSD、アルコールなど異なる作用をもたらし、依存性

や退薬症状も大きく異なる「ドラッグ」群の違いについて、多くの人々は関心と知識を持っていないくとも、アルコールとニコチンを除けばそれらが脅威であるとする見解の一致がみられるだろう。ニコチンは強い依存性を持ち、アルコール依存者の退薬症状は数あるドラッグの中でも激烈であるが、これらは合法であるが故に問題化されることはない。

社会一般の合意を得て、規制当局が職務を推進するためには、大衆社会の関心を惹くと同時に、内実の実証的知見について空白のままにしておかなければならない。このことを熟知していたのは、ジョセフ・マッカーシー上院議員だけではなく30年代の連邦麻薬局長官であったハリ・アンズリンガーもであった。

戦後米国と国際社会において、特にニクソン政権以後に猛威をふるった大麻摘発の導火線は30年代米国にある。大麻規制の世界的影響は、米国に限っても「ドラッグ戦争」の砲火が過熱すると毎年50万人から100万人の摘発者を生み、世界的にはさらに無数の人々に厳罰となって降り注いだ。逮捕者らは、行政官僚や法執行者から統計学的にみれば数量とされたとしても、そこには紛れもなく一人一人の人生があった。

本稿は、社会学的観点とりわけモラルパニック論を念頭におきながら、30年代米国を中心とした大麻規制の構築を検討するものである。往時における大麻規制法は官僚的に上からなされたものであるが、同時に、大衆社会側もタブロイド紙や三文映画が問題を拡散して世間の耳目を集めた。ここでは、メキシコ人、黒人そしてジャズミュージシャンらと大麻は表象として不可分であり、脅威によって被害を受ける白人女性や少年が戯画的に描かれた。

本稿では、厳密に言えば1910年代から開始されていた、一部州における大麻規制の先駆から「黄金の20年代」と禁酒法、そして大恐慌から30年代に至る戦前米国史の文脈を踏まえた上で、行政およびメディアがどのように大麻を脅威と

して宣伝・規制したのかを考察する。

2. 本稿の意義と研究史上の位置： 大麻問題の源流と原型

2.1. 社会的文脈と意義

現在カナダや米国両岸諸州で大麻所持は非犯罪化されはじめ、欧州でも喫煙者個人が刑務所で長期収監されることは稀である。こうした世界的な大麻規制の変動について、筆者は別稿で整理を行った（山本 2019）。大麻規制はニクソンからレーガン政権期の「ゼロ寛容」を標榜する厳罰主義から、合法化や非犯罪化、非罰化へとグローバルな動向としては転換しつつあるようにみえる。冷戦下における別様の戦争であった「ドラッグ戦争」が現下も変わらず継続しているのは、日本や韓国、東南アジアなどの「防波堤」諸国において典型的であるということは、国際関係史として興味深い。さて、大麻規制の歴史を大きな区分で見たときに、三つの時代区分を想定することができるだろう。

- ① 戦前期：米国で初期的な大麻規制が行われ、これは19世紀末からの「改革運動」の文脈からはじまり、ハリソン法（米国内の阿片禁止法）と禁酒法を経由して30年代のキャンペーンにおいて頂点に達する。ここでの大麻は、大衆にとって未知との遭遇であり、メキシコ人と黒人らの社会から米国を侵食する「殺人草」「若者の暗殺者」として戯画化された。しかし摘発者数は未だ100名単位に過ぎず、話題にはなったが実社会への影響は相対的に軽微であった。
- ② 冷戦期のドラッグ戦争：60年代後半から80年代の摘発増加と、厳罰化の同時進行。逮捕者数の劇的な増加。欧米ではヒッピームーブメントや学生運動と大麻が結びつけられ、多くの若者が喫煙経験を経ることで

未知のものではなくなった。この時期から、大麻は「若者を墮落させる」「ドロップアウトさせる」ものであり、またさらに後年ではヘロインやコカインなどのより危険なドラッグへの一歩（ゲートウェイ理論）として新たな脅威の表象とされてきた。

- ③ 非犯罪化や合法化：90年代半ばから現在まで、米国内でも欧州などでも、大麻の個人使用に懲役刑を科することの是非が社会的、政治的に議論され、非犯罪化や非罰化、合法化が進んだ。また、薬学などの科学的見地からして、大麻は無害ではないものの相対的にハームが少なく、身体的依存性もほぼみられないことが政策論争においても知られるようになってきた。オランダでの非犯罪化政策とコーヒーショップは有名な先駆的事例だが、その後医療目的での合法化や刑罰軽減・罰金刑などと組み合わせられ、多くの地域で大麻の単純所持に対する懲役刑は退潮しつつある。

現代的な刑罰の是非をめぐる論争や、「有害性」論争の源流を知るためには、まず30年代の状況を理解する必要がある。これは現在を知るために過去を知る必要があるといった定型句ではなく、筆者のみるところ30年代の状況と、40年代のニューヨーク市長ラガーディアによって諮問された専門家集団による反駁は、現代的な論争とほぼ合致する問題の原型を構成しているからである²⁾。

大麻問題と「実証に基づく政策形成」、そして人種差別、少数文化への批判、世論形成とポピュリズム、上からの政策と街区で生きる遊歩者の生活、これら現在の政治的および社会学的課題の源流かつ原型がこの時代には埋め込まれている。それはまるで、「ネット右派」の現代的なSNS論争と歴史修正主義のプロトタイプが、常に既に、戦前のプロパガンダと右翼運動の中

にあったことと似ている。私たちは21世紀ドイツにおける新右翼運動を理解するために、戦間期「保守革命」の思想読解に立ち戻らなければならない。現時点の歴史修正主義者が語る言説の表層にではなく、その地層にこそ、今日の前において流通する言説の権力性は宿っている。

2. 2. 先行研究

戦前米国における大麻規制の社会史・法制史に関しては、欧米では多くの蓄積がある。本邦においてこの時代の知見は断片的に紹介されてきたが、その多くは研究書ではなく一般書である。そのため、1937年のマリファナ税法（Marijuana Tax Act）を微視的に強調する見方が、当該問題に関心を持つ好事家界限には知られており、これは全く誤りではないにせよ、全貌を捉えているわけでもない。

欧米の研究では、代表的とみなせる著作を三冊あげることができる。一つは日本でも「ラベリング論」と共に知られるH.S.ベッカーの『アウトサイダーズ』であり、これは60年前後の社会を題材としつつも、部分的にマリファナ税法における「法規制者」と「道徳的企業家」の関係が取り上げられている（Becker 1973=2011）。二つ目は、A.チェイシンの実験的文体による社会史の試み『若者の暗殺者：アンスリンガー長官の変幻するドラッグ戦争史』があり（Chasin 2016）、三つ目にR.J.ボニーとC.H.ホワイトブレッドによる浩瀚な法制史研究『マリファナへの宣告：米国におけるマリファナ規制の歴史』がある。それぞれ順に概観しよう（Bonnie and Whitebread 1999）。

ベッカーの研究は犯罪社会学の古典とみなされ、「社会構築主義」の文脈を形成する一冊として広く知られているため、内容の要約は最小限にとどめよう。彼は逸脱を所与のものとしてではなく、ある社会集団が形成した規則からの逸脱であると定義し、そのため規則がどのよう

に形成されたのかを探究することの重要性を強調した。60年頃の米国社会では賭博、同性愛、大麻喫煙などがマジョリティの社会規則からの逸脱であるとされ、彼ら大麻喫煙とジャズを主な考察対象としたのであった。

この書物において戦前の法制定過程はサブテーマであり、第七章において簡潔な検討が行われている。ここでは「プロテスタンティズムの倫理」「エクスタシー状態への批判」「改革主義」が大麻規制のコンテキストにあると指摘され、筆者もこの大枠を概ね首肯するものである。

A. チェイシンの研究は法制史と言説史を対象としているが、厳密に言えば歴史学的あるいは社会学的な研究とはみなされないかもしれない。それというのも、チェイシンは文学研究者として「研究」という概念に挑戦しており、これを文体上または引用の方法論からみて自覚的に脱構築しようと試みている。

彼女の著作表題は麻薬局長官アンスリンガーが提出した雑誌記事および映画のタイトル「若者の暗殺者」からそのまま取られており、それ自体が批判的オマージュである。チェイシンは大麻だけに焦点を当てるのではなく、阿片、コカイン、禁酒法など規制の流れをつなぐ結節点として大麻規制に注力したアンスリンガーを「プロパガンダ執行者」たる喜劇の主人公として取り扱おうとした。19世紀後半からはじまる「改革運動」は、国際的な阿片規制と米国内のハリソン法を形成し、これは雲散霧消するのではなく、「万華鏡の中で変幻」するように大麻規制へと流入していった。ここでチェイシンが強調するのは、阿片であれば中国系移民、大麻であればラティーノと黒人と結びつけられていることであり、彼女の言う「麻薬と身体をめぐるポリティクス」は、アンスリンガーの流布した言説の中でアメリカにとっての「異邦人の身体」を通し浸透してきたということである (Chasin 2016: 195-198)。

ボニーとホワイトブレッッドらの共著は、初出がベッカーの著作と同時代のものであり、法制史として圧巻の一冊となっている。彼らは最初期から戦後60年代までの期間における大麻規制の歴史を三つのフェイズに分割して考察した。第一期は1915年から33年までの、州法の水準における主に医療目的での認可を受けない大麻売買への規制がある。ここでは、カリフォルニア州やメイン州などが官僚制的に「上からの予防的施策」を展開した、大麻が未だ人口に膾炙しているとは言えない時代に生じた前駆的期間である (Bonnie and Whitebread 1999: 52)。

第二期は、1933年から37年までの財務省麻薬局とアンスリンガー長官がプロパガンダ・キャンペーンを最も盛んに行った規制の流行期である。この期間を通して大麻は全米の「脅威」であると、映画や新聞を通して宣伝が行われたが、その記事の出所は麻薬局による特に根拠のない「公式発表」であった。こうした世論扇動の上で、「マリファナは裁判なしに有罪を宣告された」と彼らは論ずる (ibid: 127)。第三期は、マリファナ税法が成立した後の50年から61年であり、この時期に刑罰の拡大が行われてきたと指摘される。当初、マリファナ税法は五年以下の懲役刑であったが、再犯や三回目の逮捕においては五年以上の長期刑宣告を選択する州が増加するに至る (ibid: 218)。

本稿ではこれらの先行研究に加え、適宜他の研究書や論文からの考察を援用しつつ、新聞などの資料を補完的に用い、社会・政治的構造との関係性の中で独自の整理と理論的検討を加える。チェイシンやボニーらは社会学的立場から研究を行っているわけではなく、そのため、例えばボニーらの著作では大恐慌やイエロー・ジャーナリズムの隆盛、ハーレム地区の状況などの「社会的なもの」との関係で大麻規制が検討されているわけではない。本稿のオリジナリ

ティは、先行する研究を下敷きにしながらも、まず日本ではあまり知られてこなかった初期大麻規制をより正確に描写し、その上で先行研究では等閑視されがちであるが、重要な社会背景を併せてとりあげ、当世のモラルパニックを批判的に考察しようと試みるどころにある。

3. 社会背景：

ワンス・アポン・ア・タイム

初期大麻規制の歴史を概観する上で、20世紀前半の米国現代史と黒人の歴史を欠かすことはできない。本節では、大麻規制の叙述に必要な米国史とジャズ・黒人の歴史を概観しておきたい。もともと大麻が欧州で知られ始めたのは1840年代において、パリの文豪らが集う「ハシッシ・クラブ」が有名だが、ここでボードレルやバルザック、ユゴー、ネルヴァルといった面々が一種のオリエンタリズムと神秘主義的かつロマン主義の文学表現と共に、紫煙を味わった。この文学思想の系譜はワイマール期ドイツのW.ベンヤミンにも継承され、彼もまた大麻喫煙を行った。

米国において、大麻喫煙はこうしたオリエンタリズムから広がったのではなく、南部テキサスやニューオーリンズ、あるいはカリフォルニアの州境から流入したことは確かである (Armstrong and Parascandola 1972: 25)。メキシコやカリブ海諸島では少なくとも19世紀後半には、習俗として大麻喫煙が広まっており、メキシコ系労働者らが安価な娯楽として勤務後の夕べに大麻喫煙を行っていた。これらメキシコ国境沿いの労働者らは、工業化と都市化の進む米国にWW1以前から多く移民し、そこでニューオーリンズの繁華街で働く黒人労働者やジャズメンにも大麻喫煙の習慣がもたらされた。ニューオーリンズの遊郭街として知られたストーリーヴィル街区は、これがWW1への米国参戦によって閉鎖されるまで初期的なジャズの

中心地であった。

その後、10年代から20年代にかけて黒人史において重要な「大移動」が生ずる。すなわち、工業化の進む北部大都市圏へ、また南部での抑圧と陰鬱さを回避して、黒人労働者とジャズ奏者らはニューヨーク、シカゴ、フィラデルフィア、デトロイトなどの都市へと「北上」した。ニューヨークではそれまで、セントラル・パークの北側にあって交通上不便であった新興住宅地が荒廃しつつあったが、この街区に黒人労働者らが移住しはじめた。ハーレム地区の形成である。

20年代初頭において、大麻喫煙はまだ黒人とラティーノ、そして一部アラブ系住民の文化に過ぎなかったが、「ジャズ・エイジ」の隆盛と、これへの関心によってごく少数の白人らは「新しいヒップな文化」であるジャズ消費と同時に、大麻喫煙を行うものもあった。この時期において大麻喫煙は多くの都市で行われてきたが、規制当局の主たる関心事ではなかった。20年代には禁酒法とギャングの興隆こそが社会問題の焦点であり、29年の大恐慌は全てを押し流した。

社会史・文化史として30年代論は、「黄金の20年代」論と比較すれば少ない。それは、大恐慌後の高失業率と労働争議、国外ではナチス台頭から真珠湾へ至る道程であり、社会史上論ずるとしても定型的にならざるを得ない。現代史のテキストとして見ても、多くが「大恐慌」「ローズヴェルト」「黒人の状況」「女性の状況」「第二期ローズヴェルトと労働争議」を挙げており、その区分は否定しがたい (Olszowka et al 2014)。

37年のマリファナ税法と麻薬取締局長官の「活躍」は、リベラル左派と目されがちなF.ローズヴェルト政権下で生じたことは意外だろうか。そうではない。大麻規制だけではなく、麻薬規制は19世紀からのリベラルな「改革主義」運動の系譜から生じたものであり、プロテスタンティズムの倫理と社会改良主義が源泉である。

この運動は女性参政権運動など明らかにリベラルで肯定的な運動でもあったが、同時に道徳保守主義的な側面や、疑似ダーウィニズムと優生学などのダークサイドも併せ持っていた。カナダの最も著名な第一波フェミニストであり政治家であったE. マーフィーは、熱烈な白人至上主義者・人種主義者でもあって黒人と謎の風習たる大麻喫煙による社会侵蝕に強く反対した（Murphy 1922）。彼女の主導によってカナダは全米に先駆けて24年に大麻規制法を制定している。

ローズヴェルトは教科書的にいっても、確かに経済政策的には左派的といえるケインズ主義者であったが、同時に財政均衡にも配慮した「風見鶏的」な大統領であり、出馬した時点での政策は共和党のフーヴァー大統領と大差はなかったと評されがちである。彼のニューディール政策は効果がなかったわけではないが、その影響の多寡については賛否があり、当時の社会においても財政均衡へと傾いた時期には「ローズヴェルト不況」が批判され、失業率は30年代を通じて高止まりした。彼は一貫して「過激な労働運動」に対しては距離を取り、時代を先取りするような人権運動に対しては懐疑的であった。まるでビル・クリントン大統領のように。

特にローズヴェルトの黒人に対する態度は曖昧なものであり、南部白人の支持層を意識していたため、少なくとも黒人公民権については消極的であった。それにもかかわらず、黒人の支持票が「リンカーンの党」たる共和党から民主党へと流入したのは、ニューディール政策による恩恵を本来の意味でのトリクルダウンとして黒人も一部受けることができ、また妻エレノア・ローズヴェルトへの人気に由来する。彼女は大統領と比すれば、ずっと明確なりベラル左派であった（Quarles 1964=1994）。

20年代を通して「ハーレム・ルネッサンス」は、刮目すべき黒人運動、W.E.B. デュボイスやM. ガーヴェイらの活動家を生み、彼らは戦後のラスタファリアニズムにとっても常に参照

項とされるのであったが、ハーレム街区は大恐慌によって米国社会の亀裂をまざまざと反映した。一部の「ヒップ」な白人が注目したコットン・クラブやサヴォイ・ボールルームといった、ジャズ・ダンスホールと、人種混合の楽団を率いたベニー・グッドマンは米国文化の光の側面であるが、同時に、ハーレムでの失業率は白人地域の倍以上にのぼり、仕事はあったとしても不安定なドアマンや清掃員であった。人種の地域的隔離が続く当地において、狭いアパートに詰め込まれた16万を超える人々は耐え難い夏を過ごした（Olszowka et al 2014: 96）。

30年代の社会状況において特筆すべきなのは、「社会問題」として耳目を集めた「大事件」の連続と、イエロー・ジャーナリズムの興隆である。これは実際社会的に生ずるハームというよりは、F.L.アレンが慧眼をもって記したように30年前半の米国は三面記事に飢えていた（Allen 1939=1990）。代表例が、リンドバーグ夫妻らの子供誘拐事件（32年）であり、ボニー&クライドやJ. デリンジャーといった「大物」強盗の射殺事件（34年）である。これらの始祖はビリー・ザ・キッドであり、彼は狙いも付けずに標的に的中させた義賊としてのアンチ・ヒーローであった。

大衆新聞、三文小説、三文映画の流行は20年代後半からのギャングとアンタッチャブルの抗争などを通じて当世の時代背景に埋め込まれており、これと大衆社会の論理と心理は不可分であった。イエロー・ジャーナリズムを象徴するハースト新聞社の系列は、『市民ケーン』のようなりベラル派映画からは揶揄されたが、大麻報道においては大きな役割を果たした。それはまるで神戸連続児童殺傷事件から、秋葉原連続殺傷事件に至るまで、ゼロ年代前後の日本におけるワイドショーと「体感治安の悪化」、そして厳罰化ポピュリズムと、パラレルな関係にあるように見える。

かくしてデリンジャーと、“ベビーフェイス”

ネルソンが射殺された後、大衆メディアは新たなアンチ・ヒーローを発掘する。いや、正確には、こうしたメディア状況とタッグを組んだ、麻薬取締局からのリークと協力を得て構築したのであり、敵役の名は「マリファナ」であった。

4. リーファーマッドネス：1913-37

4.1. 最初期的大麻規制

米国における大麻規制は37年以前の助走期間と併せて理解しなければならない。州法水準においては、1910年代から各種法規制が開始され、連邦法としての「マリファナ税法」成立時には、過半数の州において大麻規制は既に行われていた。もっともそれらは額面通りに執行されていたわけでもないし、微罪として取り扱われることも多い、形式的性質のものも多かったが。

最初期における大麻規制の文脈は二つある。一つ目は、阿片問題に対して米国が主導してきた「改革主義」の潮流および国内問題としての阿片と中国系移民対策がある。二つ目は、20世紀初頭の行政にみられる官僚制的エリート主義と、人々や事物を数え上げ数値化する、M.フーコーが指摘した意味での統治性権力である。

大麻はこの時代において薬局では「インド大麻草エキス」として処方され、鎮痛剤・鎮静剤などとして用いられてきた。これを念頭においたわけでもないがT.ローズヴェルト政権下において、薬局で販売される薬品類に正確な成分表記を義務付ける法律が制定された。これが1906年の「純正食品・医薬品法」である。もっとも正確に言えば、米国での大麻に対する法的な規制文は、これが初である。アルコールやモルヒネ、カナビスの濃度を正確に表記することが、一種の薬事法として定められた。

1910年代米国において、ドラッグ問題といえはまず阿片のことである。カリフォルニア州は当時「改革運動」が最も盛んに行われた州の一つであり、また華人移民と黄禍論が取りざたさ

れた地域でもあったから、全米で阿片を禁ずる「ハリソン法」に先駆けて、医師・薬剤師以外のものが阿片およびコカインとモルヒネ売買を行うことを禁止した（カリフォルニア州1907年、劇物法）。

この州劇物法が13年に改正され、ここに大麻も付記されることとなった。この二年前には全米初の同種法律がマサチューセッツ州において制定されていたから、カリフォルニア州は二番手となる。しかし、当時薬局での医薬品ではなく、嗜好品として「マリファナ喫煙」が行われるということは、ほとんどの一般大衆は認識していなかった。法制定は、1910年頃にサンフランシスコ港へ新しく到着した、少数のインド系移民をめぐる話題からはじまる。彼らは「ヒンドゥー」と蔑視的に呼称され、また黄禍論の文脈において、奇妙な風習と異教を信ずる異邦人として描かれた。彼らの持ち込んだ水パイプと大麻草の喫煙は、とりわけそうであった（Gieringer 1999）。

また全く同時期にカリフォルニア州境では、メキシコ革命の動乱と避難民の流入、これへの対応として送られた米国兵士らがメキシコ系移民・難民らの奇妙な風習について報告しはじめていた。それは「マリファナ（Marihuana, Mariguana）」あるいは「ロコウィード（Locoweed）」などと呼ばれ、この正体が何であるかについては混同もあった。俗語でロコウィードとは、すなわちアルカロイド系の成分を含む植物群であり、日本でいえば朝鮮朝顔などが含まれる植物群への呼称であるから、カナビスとは何の関係もなかった。この概念上の混同は30年代においても残存している。

世間的には、インド系移民やメキシコ人らの喫煙習慣はニュース題材としてさほど話題にならなかったため、この時期には30年代のようなモラルパニックはほぼ観察されない。しかし熱心に「改革運動」「反麻薬政策」へ取り組んできた、州議会と行政官にとっては未然に予防す

べき悪習と映った。そのため1913年に、既にあった劇物法への修正案がほとんど議会での議論もなしに可決された。

その翌年カリフォルニア州では、1914年に史料上確認できる範囲では全米初となる大麻栽培への積極的摘発が行われた。当時の新聞が報ずるところによると、ロサンゼルス中心街に近いメキシコ人街、現在でも悪名高いスラム街として描かれる「スキッド・ロウ」のすぐ南側にあるソノラタウン区においてである³⁾。1910年代にはこれを含めて8つの州で、阿片・コカイン・モルヒネなどを禁止する劇物・薬事法に追記修正が行われる形式で、「大麻あるいはロコウード」の売買や所持が規制された。

この初期的な規制の時期におけるもっとも重要な特徴は、マリファナが不可避免的に「麻薬」の一種だと見做されていたということであり、だからこそ、当時公式化されていた反麻薬政策の潮流を呼び込んだのである。この麻薬への分類は、第一義的にはマリファナが未知のものであったことに由来する。

酒やタバコといったドラッグはアメリカの生活に馴染み深いものであったが、「麻薬」はそうではない。ここで明らかなことは、民族的マイノリティや、あるいは「不道德な連中」と結びついて捉えられたドラッグは、自動的に「麻薬」だと見做されたということである。科学的コミュニティにおいてもこうした社会的偏見が入り込んでおり、そのため科学的に正確な分析は蔑ろにされてしまった(Bonnie & Whitebread 1999: 51)。

ここにあるのは確かに、KKKのごとき激烈な人種差別やモラルパニックではない。これは行政官僚の主導によって行われた「上からの」改革運動であり、少なくとも大麻は主たる標的にされたというよりは、「後から念のため追加で入れておいた」ものに過ぎない。大麻喫煙の

習俗は社会一般には知られておらず、当局者もその具体的効果や内実について多くの知見をもっていたわけでもない。しかし「インド大麻」は、新しい「薬物・麻薬」の一種としては認識され、そのため他の麻薬と同時に取り扱われたのである。

この背景に、人種的差別と偏見が存在していたことにも留意すべきである。「新しい麻薬」は、インド人やメキシコ人が持ち込んだ珍品であり、彼らに対するゼノフォビアは政策形成における無自覚な前提である。余所者、異郷の民に対する視線は、既に最初期の大麻規制において封入されていた。

4. 2. 30年代へ：オンリーイエスタデイ

大麻関連の議論として10年代から20年代にかけて言及しなければならないのは次の二点である。第一に、喫煙習慣はメキシコ系、アラブ系移民から南部の黒人にも広まり、これが「大移動」によって北部都市の一部界限に拡散したということ。第二に、20年代において限定的ではあるが、この「未知の麻薬」に関する煽情的な新聞記事がいくつか現れ、これを来るべき脅威とみなした諸州当局は、初期的なカリフォルニア州などでの規制に追随することになったということである。

米国での麻薬全般に対する規制は、1914年の「ハリソン法(Harrison Narcotics Tax Act)」を嚆矢とする。これはハーグ万国阿片会議を受けて締結された1912年の国際条約「万国阿片条約(International Opium Convention)」を受けて、条約履行のため米国内での阿片、コカ製品を規制する連邦法であった。もちろん、この国際条約自体もまた改革運動時代の米国主導によって制定されたものである。「ハリソン法」は税法として阿片およびコカ製品を、医療目的以外において流通させることを制限した法律であるが、当時はまだ大麻が世間一般には知られておらず、科学的知見も定まっていなかったため

規制には含まれていない。そのため、前節でみた通り州ごとで運用も規定もまちまちな州法が、20年代においても制定されていくこととなる。

もっとも、20年代における州法規制は単に形式上、麻薬規制関連の州法に修正文を追記しただけで、実務的にはあまり用いられなかった場合も多い。その処罰も懲役刑から罰金刑までばらつきがあり、積極的に、警察に協力する私立探偵の雇用なども行って摘発を行ったのは、事実上カリフォルニア州を代表例とした少数の州においてのみであった。摘発数は、年間で十件単位もしくはカリフォルニアにおいても百件単位の範囲内である。

この時期において、大麻はいくつかの煽情的かつ、謎めいたものに関する三面記事として取り扱われたが、社会的にみればずっと大きな問題は禁酒法とギャングをめぐる論題なのであり、世論も当局も大麻にはあまり関心を寄せなかった。しかし、30年代における「リーファーマッドネス」言説を先取りするような、典型的記事を二つみてみよう。一つ目は、25年における、メキシコでの連続殺人事件を取り扱ったものである。

「病院で6人が殺害：マリファナによって狂ったメキシコ人が、肉切り包丁で暴れまわった」

マリファナ喫煙によって狂ったエスクレード・バレー、27歳の元メキシコ海軍兵士が、現地病院で肉切り包丁をもって暴れまわり、彼が落ち着くまでの間に6名を殺害した。

バレーは病院で働いており、警察が取材に応じたところによると、彼はキッチンで包丁を掴み、突如コックと他の従業員を刺した後、さらに4名の患者を刺殺し、他の従業員によって取り押さえられた。

警察によると、彼は拘置所において騒動について何も知らないと述べている。

(New York Times, Feb. 21, 1925)

また、27年には同紙において別の記事もある。こちらはメキシコ系「亡命人」と4人の子供が、貧窮のため野草を調理したが、その中にマリファナが混じっていたため、全員が即座に発狂し、「残りの一生を狂気の中で過ごすだろう」との医師談話が付されたものである⁴⁾。

これらは大きな扱いをされた記事ではないものの、30年代中頃に展開されるモラルパニック言説の原型を構成している。ここにあるのは、マリファナが「発狂」および「殺人事件」を直接誘引するという、極端な危険性言説である。現代どころか、60年代においてすら若者らの大麻喫煙が広がった社会状況においては、このように荒唐無稽な記事が成立する余地はまずないだろう。当世では、シニフィエとしてのカナビスに関する知見が空白であるため、記事の表象は空想的に自由である。

一方で、大麻喫煙は北部主要都市に、少なくとも25年以降には広まっており、シカゴ、ニューヨークなどの黒人居住街区では、禁酒法下において高価だった酒よりも大麻が知られつつあった。ルイ・アームストロングは早くからニューヨークを根拠地として活動し、彼に続く「ジャズ・エイジ」の巨人たち、デューク・エリントン、キャブ・キャロウェイ、シドニー・ベシエ、スタッフ・スミス、そしてデビューしたてのエラ・フィッツジェラルドらは、20年代中頃から30年代にかけて、大麻やあるいは他のドラッグに関する楽曲を発表した⁵⁾。もっとも、ビッグ・バンドとして最大の知名度を誇った白人リーダー、ベニー・グッドマンはこうした不穏なるものたちの共同体に共感をもって応対したとしても、最後の一線では距離をとっていたのだが。

特に「サッチモ」ことルイ・アームストロングは無類の大麻好きであり、彼は一生涯、毎日の大麻喫煙を欠かさなかった。彼に言わせれば「大麻はウイスキーの千倍もまし」なのである。サッチモらに大麻を供給していたのは、今日で

はジャズ・クラリネット奏者としての名前よりも、最初期の大家プッシャーとして記憶されるメズ・メツロウである。彼は23年頃からジャズを学び、30年頃にはニューヨークでもっとも知られた「大麻供給者」であった。彼いわくこの頃にはもう「マリファナは、ハーレム地区を席捲」しており、「黒人少年らは、これはメズのプツと同じくらい良い」ことを売り文句にしていた。そしてサッチモは、メズの大口顧客であった (Mezz Mezzrow & Wolf 2016: 244)。

この頃、大恐慌によって「ハーレム・ルネッサンス」の商業的活況は最盛期と比べれば落ち着きをみせていたが、依然としてジャズが最先端の「ヒップな」音楽であったことには何の変化もない。ハーレム地区は多数のダンスホールが営業され、富裕かつ教養ある白人層の需要も高かった。黒人初のイラストレーターと評されるE.S. キャンベルは、盛り場の活気と同時に、「二本で25セント」の大麻煙草が売られる行商人の姿も忘れずに描いている (写真1)。

1930年冬、ジャズ人気の高まりを受けてロサ

ンゼルスでも設立された名高い「コットン・クラブ」での公演前に、サッチモは探偵および警察官らに大麻喫煙の現場を押さえられ、州法によって拘束された。カリフォルニアは当時の米国でもっとも積極的かつ重い刑罰運用を行っていた州の筆頭であるが、この時サッチモは執行猶予がつけられ、実質的には罰金と九日間の拘置を受けただけであった (Jones & Chilton 1988: 132)。

4.3. マリファナ税法へ

「黄金の20年代」を吹き飛ばした大恐慌の嵐は、フーヴァー大統領を危機に追いやった。法制度としての「高貴な実験」こと禁酒法もまた、来る32年大統領選において焦点となり、禁酒法の部分解禁と、これによる税収増をかけたF.ローズヴェルト大統領が地滑りの勝利を収めた。しかし、禁酒法の撤廃を行ったローズヴェルトの治世において、戦後ドラッグ戦争を準備することとなる機関の拡大とマリファナ税法が成立したことは、歴史の皮肉というべきであろう

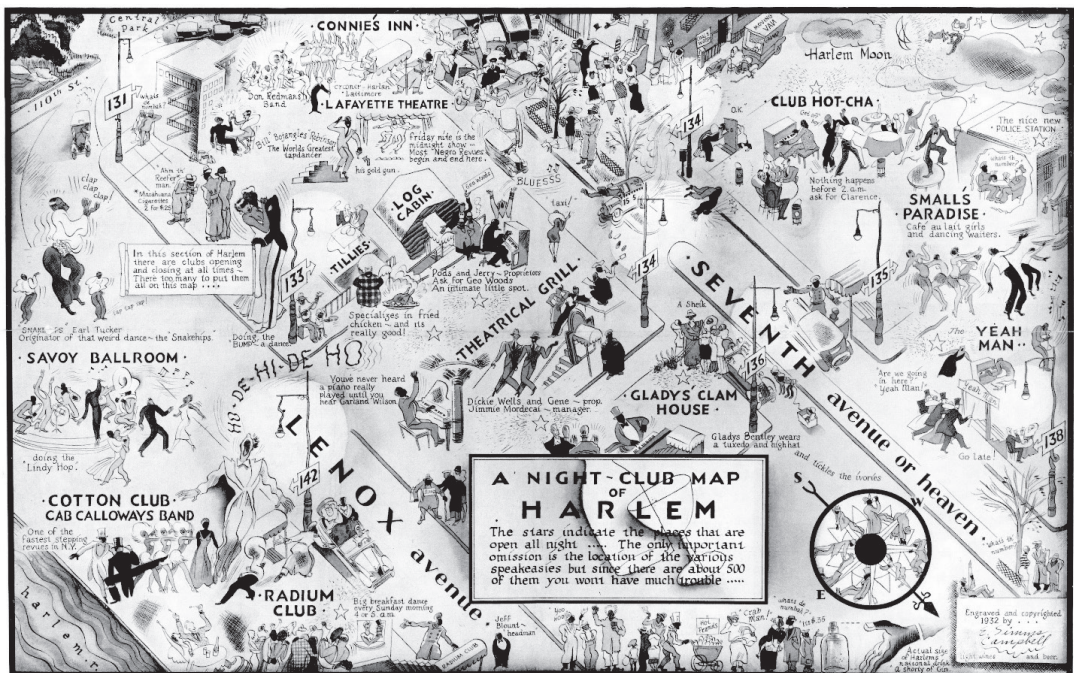


写真1 Campbell, E. S., 1933, "A NIGHT-CLUB MAP of HARLEM." *Manhattan*, 1 (1).

うか。

フーヴァー政権の折り返し地点にあたる30年6月に、ハリソン法の国内執行機関を統合した「連邦麻薬局」(Federal Bureau of Narcotics: FBN)が財務省の管轄下において設立される。初代長官は、H.J. アンスリンガーであり、彼はフーヴァーからローズヴェルトを経て、戦後ケネディ政権に至るまで米国の麻薬統制界に君臨した大物行政官であった。FBNはその後一度の統廃合を経て、ニクソン政権以降、現在も強固にそびえ立つ、かの「麻薬取締局」(Drug Enforcement Administration: DEA)となる始祖的組織である。

アンスリンガーは、注目すべきキャリアと言動の持ち主であり、彼に言及する多くの先行研究でも、アンスリンガーは以下の表現によって描写される。すなわち、「熱烈な道德保守主義者」「プロパガンダ主義者」「レイシスト」の三点がそれであって、確かに彼の差別的言動は否定しようもない(Bonnie & Whitebread 1999; Chasin 2016)。一言でいえば、彼は30年代におけるマッカーシー上院議員であった。マリファナに関して言及するとき、彼は多くの場合「ニガー、ニグロ」や「メキシカン」の脅威を念頭におき、とりわけ黒人とジャズを侮蔑的に名指しした⁶⁾。

FBNが設立された当初、アンスリンガーもフーヴァーも、目下のところ禁酒法問題に取り組んでおり、また麻薬の脅威としてはコカイン、ヘロイン、阿片に注力していた。マリファナは徐々に知られつつある「問題」であったが、FBNは当初マリファナを副次的な問題に過ぎないと位置づけた。潮目が変わるのは、新たな大統領が禁酒法をまず部分緩和し、その後撤廃した33年においてである。

禁酒法撤廃とギャングの退潮によって、アンスリンガーは彼の部局が目下の仕事を失いつつあり、ギャングと麻薬の問題に関して徐々に閑職となるのではないかと懸念したかもしれない。

しかし彼の内心を推察するよりも、そこで取られた言動に注目しよう。この年以降、彼は「新たな脅威」としてマリファナ問題を掲げ、各州でまちまちであった大麻規制法を統合する「統一麻薬法」(Uniform State Narcotics Drug Act)の成立に向けてFBNをあげて邁進することとなる。特にメディアに対するキャンペーンは35年から37年にかけてピークに達する。

H.S. ベッカーも指摘するように、こうした当局主導の政策を実現させるために必要なことは「有利な世論を醸成しようとコミュニケーション・メディアを利用」することである(Becker 1973=2011: 訳145)。往時のメディア状況は多面体であった。アンスリンガーは、自らも筆を執って思いつく限りのメディア、すなわち新聞、雑誌、ラジオ、映画産業、児童や教育者向けのパンフレット、三文小説やコミックスなどで、マリファナをあらゆる危険性と結びつけて宣伝がなされるよう操作的に情報を公開し、当該問題を扱うよう推奨した。やや後年になるが、長官のお気に入り、マルコポーロ伝説にある「山の老人」の逸話を漫画にしたもので、これは「無垢な若者が、山の老人に騙されてハシッシを吸引し、アサシンへと変貌して凶悪殺人を犯す」ものであった⁷⁾。

『ニューヨーク・タイムズ』などの高級紙はやや慎重にはあったが、30年代を通してマリファナ問題に注目し、より大衆的なイエロー・ジャーナリズムは、商業的目算から嬉々としてこれを報道した。特に全米でも最大規模であったハースト新聞社のネットワークは、明確にFBNと共同歩調をとって長官による裏付けの不確かな発表とリーク情報に、さらに尾ひれをつけて報道した。ベッカーが数え上げたところでは、『リーダーズ・ガイド』誌に掲載されたマリファナ関連記事は、35年から増加しはじめ5件から37年～39年の期間に17件へと至る(Becker ibid: 訳141)。

また、ハースト新聞社の傘下にあった『シラ

キューズ・ヘラルド』では、31年の記事は書かれていないが、33年頃から年数件が書かれ、37年には12件に急増する。『ニューヨーク・タイムズ』では20年代から各州やメキシコの状況をめぐる時事的な記事が書かれているがその数は少なく、30年と31年は二年分を併せて4件に過ぎない。これが34年から明確に急増し、34年に12件、35年に11件となり、これ以後二桁で推移する⁸⁾。この時期における大衆雑誌を研究したJ.L. ヒンメルシュタインは、雑誌記事においては、ほぼ全てがマリファナと「危険性」を結び付けて論じ、85%は「暴力」「犯罪」との関連で描写されたと指摘した(Himmelstein 1983: 61-63)。ボニー&クライドとデリンジャー亡き後、「パブリックエネミー」としてのマリファナは人気の敵役であった。

アンスリンガーが恣意的に広めた「事件」情報は、三文小説やタブロイド記事となり、さらにそれは長官自身によって「メディアで報じられた事実」とされ、全てファイリングされた。有名なアンスリンガーの「ゴア・ファイル」である。これは議会答弁や、さらなる情報拡散のために用いられたが、ここにみられるのは虚実織り交ぜた情報の創出と記事化、そして記事を「根拠」とする新たな情報の拡散である。

『アメリカン・マガジン』37年7月号には、満を持して長官自身が監修・執筆した「若者の暗殺者」が掲載された。ここではマリファナによって錯乱した若者らの状況が戯画化されており、ある女子高生は「アパートの窓から即座に飛び降りた」とされ、これは「最も典型的な事例」であると付言された。マリファナはあらゆる少年犯罪、「殺人、自殺、強盗、暴行、恐喝」と結びつけられ、脅威は至る所に潜伏しており多くのコミュニティでは大人たちの無知によって見逃されている、と警告された。

突如、理由もなく彼は自身の命が何者かに脅かされていると確信し、もはや彼の命は風

前の灯のように思われた。彼は乱雑にあたりを見回し、一人の年老いた靴磨きの姿を捉えた。マリファナによって錯乱した脳神経は、この老いた男性をたちまち怪物であると認識した。恐慌状態となった彼は、銃を取りに戻って靴磨きを射殺し、少し経ってから彼は、一体何が起こったのかと哀しくつぶやいた。理由なき殺人。

「誰かが私をつけ狙っていると思いました」と彼はいう。「それが唯一の理由です。私は被害者との面識もありません。ただ何者かが老人を殺せといったんです!」。

これがマリファナだ!

(Anslinger & Cooper 1937)

アンスリンガーとFBNの「公式見解」は、新聞・雑誌メディアで人気を博したのみならず、映画産業にも影響を与えた。映画業界の中でも、二流以下の配給元が低予算で、煽情的な文句を添えた短めの娯楽映画を複数制作した。ほとんどの筋書きで、マリファナの犠牲になるのは若者であり、女性は無垢な被害者として位置

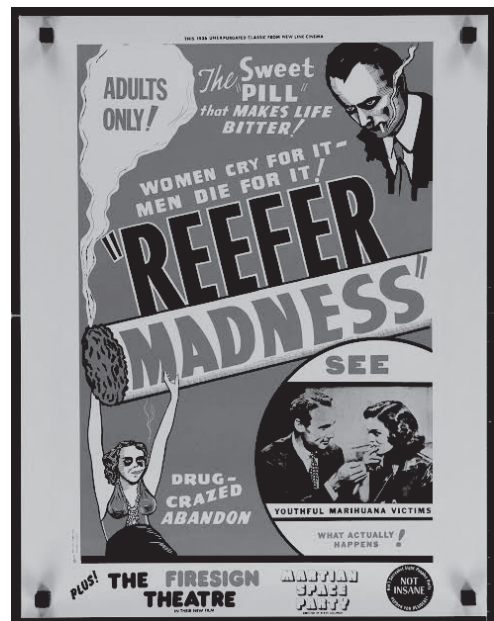


写真2. 映画『リーファーマッドネス』(1936)のポスター

づけられるか、もしくは犯罪者と共謀して自滅的運命を導くファムファタールへと変貌していく。ここでは性的な逸楽、狂気に至る若者たち、乱痴気騒ぎ、そして殺人と犯罪が好んで描かれた。長官が「黒人の音楽」として嫌ったジャズは、これら映画の作中でもダンス場面において用いられ、それは決まって若者らが大麻を入手する場所の一つであった（写真2）（表1）。

これらのメディア群で描かれた大麻は「狂気」「強い依存性」「殺人衝動」「性的衝動」の

“Reefer Madness.”

1936, L.J.ガスニエ監督, 68分

- ・もともとは、教会団体が自主制作した“Tell your children.”という短編。
- ・高校生らがマリファナ喫煙によって、殺人、性犯罪に手を染め、最終的に狂気に至るさまを描いた。「リーファーマッドネス」の語は現在でも「反大麻キャンペーン」を揶揄する含意で用いられている。

“Marihuana.”

1936, D.エスパー監督, 57分

- ・エスパー監督は、上記『リーファーマッドネス』のプロデューサーでもある。
- ・マリファナ喫煙が行われたパーティで、放埒な女性がさらに落ちぶれていき、最終的ボーイフレンドを死に追いやり、ヘロイン中毒になるというファムファタール物語。

“Assassin of Youth.”,

1937, E.クリフトン監督, 80分

- ・アンスリンガー記事と同名で、脚本は記事内容を部分的に共有している。
- ・「悪い友人」らに巻き込まれた真面目な女子高生が陥れられていくが、最終的には友人らの犯罪が暴かれる。数度のパーティにおける狂態、発狂と死がマリファナと結びつけられる。

表1.「リーファーマッドネス」映画。筆者作成。
この系譜は40年代にも継続し、42年“Devil’s Harvest.”
そして49年“She Shoulda Said No!”へと引き継がれる。

一義的な原因であると見做され、被害者は典型的に白人の若者たち、とりわけ若い女性とされた。典型的な言説のパターンは、女性が大麻喫煙によって「自殺、狂気」へ向かうか性的衝動の餌食とされ、「最悪の場合は黒人の子供を妊娠する」のだと、すべての親たちに注意喚起がなされた。もはやマリファナは、FBNによれば阿片やコカインなどよりも最悪の厄難なのであった。

1937年、こうして醸成された世論を根拠として、財務省およびFBNの主導で「マリファナ税法」が起草された。法案はマシンガンなどの流通を税法によって規制する連邦火器法（National Firearms Act, 1934）の手法が採用され、これは課税のためではなく物品規制を目的とした実質的な規制法であった。大麻の譲渡・売買には財務省の認可が必要であり、認可されない取引は全て違法物品である。そして財務省のスタンプが押されることは、これ以降なかった。

下院における審議では、一部の業界団体、特に大麻種子をハトの餌として流通させる粒餌業者から反発を受け、そのため「発芽した状態の大麻」が規制対象となった。またカナビスを薬局で取り扱ってきた全米医師会の代表委員は、世間で言われているような「大麻の脅威」は過大評価されているとの懐疑的かつ、これを医師の管理下におくべきであるとのコメントを寄せたが、大勢には影響を与えなかった。

5. むすびに：大麻とモラルパニック

30年代に生じたドラッグ戦争の前史は、S.コーエンが提起する「モラルパニック」概念に適合する。「社会問題の構築主義」のほんの少し手前で、社会構築主義の観点を形成したコーエンの概念は、「民衆の悪魔（Folk Devils）」として、逸脱表象が拡散していく様相を、以下のキーワードで分析したものである。

まず「恐怖というよりは、問題への社会的関

心」が先だってあり、これがマジョリティの道徳性にとって「敵対的」であると規定される。その後、当該問題を脅威とみなす大衆の「合意」があるが、多くの場合これは科学的・実証的な見地からの危険性判断とは「不均衡」に過大評価されがちなのである。そしてモラルパニックは一種の流行現象として消費され「揮発性」を持つ場合がある (Cohen 2002: 16-17)。

コーエンを念頭において言えば、アンスリンガーは確かに扇動政治家のように「マリファナ問題」を燃え上がらせ、この脅威を過大に提示した。しかしそれは同時に、30年代における白人マジョリティの道徳性や偏見を前提とするものであって、いわば「どの良家の娘も、黒人やジャズクラブの脅威に晒されている」ことを強調する手法で行われた。この意味において、戦前大麻規制は大衆的なレイシズムを後景としながら、これを扇動することで可能となったものであって、アンスリンガーは確かにマッチを擦ったが、可燃物は大衆社会の内部に予め置かれていた。麻薬取締局は、歴史的にみれば二度ベルを鳴らした。一度目はこの人種主義と結びついた脅威の扇動であり、二度目は戦後「ドラッグ戦争」の号砲として。

これに対して、専門家集団もマリファナおよび人種の偏見から自由ではなかったが、若干の距離もあった。25年にはパナマ運河地域における実証調査では「大麻の脅威は過大評価されている」と結論づけられ、44年にはニューヨーク市ラガーディア諮問委員会もまた、大麻の有害性と依存性は世間で言われるほどのものではないと報告し、アンスリンガーと対立することとなる。この論点は別稿で論ずることとし、モラルパニック論を敷衍しよう。

コーエンの議論は対象とする「社会問題」の構成過程に焦点をあてたものであるが、S.ホールのモラルパニック論は、問いの次元を文化的ヘゲモニーとイデオロギーとの関係性に位置付けた。ホールは70年代の「非行少年」「厳罰化」

の動向を、サッチャリズム的な新自由主義イデオロギーの反映と捉え、「戦後的な福祉国家の合意」から、「新自由主義と、断固としたリーダーシップ」の強調へと、文化的ヘゲモニーが転移する過程として批判した (Hall 1978)。

しかしそれでは、修正資本主義あるいは福祉国家の範例的始発点というべきローズヴェルトのネイションにおいて、「マリファナ問題」はどこに位置付けて評すべきだろう。それは、合意と配分の政治に予め埋め込まれた、公民を分割する「政治そのもの」の亀裂である。議会政治によって行われる配分的政治は、公民・国民として数え上げられる人々の内部で、どのように福祉や分配を行うべきかを検討する次元にある。これに対して、その前提条件として一体誰が「普通の国民」であるのか、誰が「人民」に含まれるのかをめぐるポリティクスを、筆者は「政治そのもの」と呼ぼう⁹⁾。

ニューディール政策は確かに、一部の「真面目な黒人」に仕事をトリクルダウンし、これによってローズヴェルトは黒人支持票を固めることができた。これは経済政策史として評価されるべき一面であったとしても、一方でカラードは公民権を持たない「二級国民」のまま据え置かれてきた。ここにおいて、白人中産階層の大衆は新しくカラードと結びついた脅威に対して適切に対処する必要があると提示された。そしてその脅威は、大恐慌の時代にあってマジョリティから奪われ、手の届かない何かに由来しているように描かれた。不安を抱える大衆から、「盗まれた享楽」としてのマリファナ。

そのような不埒な物品と逸脱集団に対して、適切に当局とマジョリティは対処し、そして同時に「真面目に勤労する黒人」を配分的政治におけるバスの後部座席に加えることを許可するのは、全く矛盾しない。だから本稿では、ホールに倣いつつ初期大麻規制のことを、合意と配分の政治に予め供えられた「政治そのもの」の亀裂だと評しよう。この裂け目は、暫し世界大

戦の熱狂によって忘れられるが消失したわけではない。亀裂は少しずつ拡大し、ビートニクからヒッピー、ベトナム戦争の時代において次は新たに「ドロップアウト」の象徴として注目され、万単位の人々を刑務所に飲み込むゲートウェイのように開口していくのである。

注

- 1) 大麻は学名Cannabis Sativa L.であり、本稿で学名としての呼称を意識する際にはカナビスと記述し、一般的な呼称として用いる場合は大麻と記す。そして通俗的な当時の文脈の中で記述するにはマリファナとする。米国社会で通俗的に呼ばれてきたマリファナがMarijuanaと表記されるようになったのは戦後のことであり、戦前はMarihuanaと書かれてきた。その為本稿の英文表題は後者となっている。
- 2) 44年ニューヨーク市ラガーディア諮問委員会の報告書と、これが位置する文脈については別に翻訳原稿として、「社会学的調査」部分の翻訳に訳注を付して近刊予定 (New York City Mayor's Committee on Marihuana 1944)。
- 3) ロサンゼルス・タイムス1914年10月10日付、ソノラタウンにて警察が二か所を「襲撃」したと報道された。
- 4) NYT, 1927年7月6日付「メキシコ人家族が発狂」との報道。
- 5) ジャズアーティストらの「リーファーソング」としては、ルイ・アームストロング、29年の「マグルズ」(隠語で大麻の意)を嚆矢とし、キャブ・キャロウェイの「リーファーマン」も有名である。この系譜は37年頃にピークに達し、すなわち世間的に言われている「スクエア」な流言を黒人アーティストらはからかい、作品に反映した。例えば、38年シドニー・ベシエの「ヴァイパー・マッド」(大麻喫煙者を隠語でViperと呼ぶ)、38年デューク・エリントンは“Ol' Man River”の歌詞を「葉っぱをくゆらせよう」と言い換えた。筆者の数えたところ、29年以来著名ではないアーティストも含めれば30曲以上が制作されている。
- 6) 彼はいつもアフロ・アメリカ人を「ニガー」と蔑称しジャズを嫌って、これを「悪魔的な集まり」であり大麻喫煙常習者の巣窟であると非難した。またE.グッドとN.ベン-イエフダ

らも30年代におけるアンスリンガーの宣伝と黒人表象との結びつきを指摘した (Goode & Ben-Yehuda 2009: 200)。長官についての参考記事としてL. Smith, 2018, “How a racist hate-monger masterminded America's War on Drugs.” *Timeline*, Feb. 28.

- 7) 1948年に発売された無署名のコミックス“THE KILLERS #2: Assassins! Mad Slayers of the East!”では、アンスリンガーが広めた「ハシッシ=アサシン」の伝説が引用されている。無論、マルコポーロの『東方見聞録』が参照項だが、実際にアサシン教団がハシッシを用いていたことを示す史料は何もなく、これは言葉遊びに基づく20世紀の風説である。
- 8) NYT記事数は有料会員用の検索を用いて20年代から30年代の記事範囲で「Marihuana」のワード検索を行った。多くに「マリアナ・リチャードソン」の人名が含まれたため除外し、マリファナ関連のワードだと思われるものを抽出した。「シラキューズ・ヘラルド」記事数はantiquecannabisbook.comに掲載された論題一覧を参考にした。
- 9) 無論、この用法は近年のラディカル民主主義に関する政治哲学、例えばJ.ランシエールやJ.バトラの議論を念頭においている。ランシエールや「政治」と「政治的なもの」を区分し、バトラは『アセンブリ』においてアレントの批判的読解を通して「誰が人民として数え上げられるのか」と問うた。

文 献

- Allen, F. L., 1939, *Since Yesterday*, Harper & Row. (=1990, 藤久ミネ訳, 『シンズ・イエスタデイ: 1930年代アメリカ』筑摩書房).
- Anslinger, H. J. & Cooper, C. R., 1937, “Marihuana: Assassin of Youth.” *American Magazine*, Vol.124: pp.18-19.
- Armstrong W. D. & Parascandola J., 1972, “American Concern Over MARIHUANA in the 1930's.” *Pharmacy in History*, 14(1): 25-35.
- Becker, H. S., 1973, *Outsiders; Studies in the Sociology of Deviance*, The Free Press. (=2011, 村上直之訳, 『完訳アウトサイダーズ: ラベリング理論再考』現代人文社).
- Bonnie, R. J. & Whitebread, C. H., 1974(1999), *The Marijuana Conviction: A History of Marijuana*

- Prohibition in the United States*, Lindesmith Center.
- Chasin, A., 2016, *Assassin of Youth: A Kaleidoscopic History of Harry J. Anslinger's War on Drugs*, The University of Chicago Press.
- Cohen, S., 1972/ 2002, *Folk Devils and Moral Panics: The creation of the Mods and Rockers*, Routledge.
- Gieringer, D. H., 1999, "The Forgotten Origins of Cannabis Prohibition in California." *Contemporary Drug Problems*, 26: 237-88.
- Goode, E. & Ben-Yehuda, N., 2009, *Moral Panics: The Social Construction of Deviance*, Wiley-Blackwell.
- Hall, S. et al., 1978, *Policing the Crisis: Mugging, the State, and Law and Order*, Palgrave Macmillan.
- Himmelstein, J. L., 1983, *The Strange Career of Marihuana: Politics and Ideology of Drug Control in America*, Greenwood Press.
- Jones, M. & Chilton, J., 1971/ 1988, *LOUIS: The Louis Armstrong Story 1900-1971*, Da Capo Press.
- Mezz Mezzrow. & Wolfe, B., 1946/2016, *Really the Blues*, The New York Review of Books.
- Murphy, E., 1922, *The Black Candle*, Thomas Allen Publisher.
- New York City Mayor's Committee on Marihuana, 1944, *The Laguardia Committee Report New York*.
- Olszowka, J. et al., 2014, *America in the Thirties*, Syracuse University Press.
- Quarles, B., 1964/ 1987, *The Negro in the Making of America*, Macmillan. (=1994, 明石紀雄ら訳, 『アメリカ黒人の歴史』明石書店).
- 山本奈生, 2019, 「大麻に関する世界的な動向」『犯罪社会学研究』44: 126-33.
- (やまもと なお
 佛教大学社会学部 准教授)